

児童文学批評というたおやかな流れの中で ②

― 九〇年代児童文学は夏の庭で千人の小人たちと足ぶみをしていた。 ―

細谷 建治

*『夏の庭』（あるいはスキル）

児童文学をこれから書きたいと思っている人は、入門書を読むよりも、湯本香樹実『夏の庭『The Friends』（福武書店 92年5月）を読むといい。

例えば、出だしの『オバケ葉っぱ』だ。

ぼくがこいつをひそかに『オバケ葉っぱ』と名づけたのは、二年生の時だった。そのころ、ぼくの背はどちらかというと小さいほうで、今みたいに『きゅうり』とからかわれることもなかった

それから、『オバケ葉っぱ』に夢中な二年坊主のぼくが、六年生を「すばらしく強く、大きく、おそろしくさえ思えた」が「あのころ思っていたように、強くもおそろしくもないけれど、ぼくは六年になった」と対比的に語られる。ちなみに、『オバケ葉っぱ』がこのあと、この作品に登

場することはない。『きゅうり』というあだ名のひよろり

とした六年生を紹介するために触媒として用いられたにすぎないスキルだからだ。『きゅうり』というあだ名自体、このあと出てくるデブの山下、メガネの河辺との対比のためのもので、このちとくに役立つこともない。とっておきのスキルは、その次に出てくる。

「おい、木山」

ヤバイ、あてられた。ぼくはできるだけのろのろと立ち上がった。

一人称の物語の場合、他の登場人物に名前を呼ばせる。これが一番のスキルだ。《一人称主人公の名前を相手の会話体の中に入れるスキル》は、だれにでもできる簡単な技だ。冒頭でガラガラと自己紹介を続けるよりは、はるかに気がきいている。しかし、一人称の児童文学の出だが、